

いま求められるグリーンガイダンス

高野 慎太郎（自由学園女子部中等科高等科）

【いま求められるキャリア教育】

2015年に国連で採択されたSDGs:Sustainable Development Goalsが世界的な広がりを見せるなか、教育の領域においてはESD:Education for Sustainable Developmentを中心として、社会変革を指向する教育が求められてきました。

2020年のユネスコの文書“Education for sustainable development:a roadmap”では、「ESDは、持続可能な開発のための大きな変革に照準をしばり、適切な教育的介入を行う必要がある。大きな変革とは、社会構造の再編と結びついた個人の行動における変容を意味しており、より公正で持続可能な方向への変革の追及がESDに求められている」との方向性が出され、「持続可能な開発のための教育（ESD）に関するベルリン宣言」（2021年5月）においても、「我々の約束」として「個人及び社会的側面の変容に向けた行動能力に共に重点を置きながらESDを実施し、持続可能な開発、平等及び人権尊重に向けた個人の行動変容、並びに経済・社会のシステムレベルでの根本的な構造改革・文化変容を推進」と宣言されましたⁱ。

こうした社会変革への指向が教育への再構想を招きます。2021年11月にユネスコが公表した報告書“Reimagining our futures together : a new social contract for education”によれば、「平和で、公正で、持続可能な未来を形成するためには、教育そのものが変容されなければなりません」

「（教育の）再構想という行為は、私たちが相互に影響を与え合いながら共有する未来を、共に創造していく作業を意味します」ⁱⁱ。改めていま求められる教育は何でしょうか。ユネスコはキャリアの視点を示唆します。前掲報告書でユネスコは「教育」の言葉を「生涯を通して教え、学ぶことを組織化する方法」と定義し、「未来への学習機会を閉ざすことなく、職業情報へのアクセスを提供するような学習経路の設計が重要です」「教育を受ける

権利はより広範に捉えられるべきです。単に通常の学校教育という枠組みでは、もはや十分ではありません。生涯学習への権利を推進すべきです」としましたⁱⁱⁱ。こうしていま、SDGs・ESDの文脈からキャリアの視点が求められているのです。

【グリーンガイダンスの発想】

持続可能性の観点から社会変革を指向するキャリア教育にグリーンガイダンスがあります^{iv}。ピーター・プラントの議論はこうです^v。キャリア教育はパラダイム転換の只中にある。最大の転換は、経済成長を前提として展開してきた個人主義的なキャリア教育からの転換である。キャリア教育の主要理論は、いずれも北米の中産階級のものであって、個人主義文化を反映したものに過ぎない。個人のキャリア選択・経済成長・繁栄が直線的に結び付けられており、経済成長が不可欠であると暗に教育してきた。その結果、個人のキャリア選択は、市場の「見えざる手」によって集合善（としての経済成長）へと集約されてきてしまった。

そこでプラントは次の指標を提示して、持続可能性というビジョンに基づいたキャリア教育（グリーンガイダンス）へ立ち返れといます。①キャリア教育は、キャリア選択とキャリア開発が環境に与える影響を考慮し、認識を深める必要がある。②キャリア教育は、持続可能性に貢献する職業訓練と職業教育の機会を確立するために、積極的な役割を果たすべきである。③キャリア教育に関する情報資料には、環境的側面を含めるべきである。④キャリア教育の成果は、経済的な尺度だけでなく、グリーンアカウンティング、つまり、持続可能性の目標とガイダンスの活動との関連付けによって測定されるべきである。⑤キャリア教育の理論と実践は、より広範に持続可能性とキャリア開発に関わる問題を扱うべきである。斯様な議論は、社会変革の構えとちからを育む実践としてキャリア教育が構想される可能性を示します。

【日本のグリーンガイドの視点と実践】

前掲の報告書や宣言にてユネスコは、教育実践に際して当該地域の地域性や文化性を尊重すること：the decolonization of curricula を強調してきました。日本的なグリーンガイド実践の鍵は「全体論」にあると私は考えます。例えば文化論の領域では〈自意識+身体〉と〈環境（自然）〉を不可分と見做す思想伝統があります^{vi}。山川草木の如き自然環境と心身を一体と考える唯識の「依正二報」に代表される発想です。授業論においては、目的指向的な学習方法を退け、生活全体に根差した学びを顕揚する文脈があります^{vii}。制度論的には、一人の教員が特別活動・学級活動・教科教育などの全体に関与できる点に日本の独自性があります。こうした日本的（全体論的）文脈を踏まえて行ってきた実践を以下にご紹介します。

第一は、学校行事のグリーン化です。例えば、進路講話にグリーンジョブの従事者を招いたり、林間学校の際に、その地域のグリーンジョブの職場見学や職業講話を組み込んでいくものです。

第二は、ホームルームの時間を活用した実践です。まず、「グリーン」を核としたキャリアの振り返りと対話の実践があります。これは、グリーン観点から各自のキャリアを語り合うものです。次に、大学や企業に関するアセスメント・マップ作りです。これは、卒業生へのインタビューや大学・企業の広報情報などをもとに、その機関の「グリーン指数」を生徒が分析して評価を行うもので、成果物は教室に掲示したり進路相談の際に資料として活用します。さらに、職業の「グリーン化」も行います。将来就きたい職業や気になっている職業に既に自分が就いていると想定して、仕事の内容や方法をグリーン化する方策を考えるものです^{viii}。続いて、長野県にある村落でのキャンプです。一週間滞在し、労働を通して村に貢献するとともに、自然のなかで身体感覚を取り戻すワークやグリーンジョブ従事者の講演を聞いたりします。

第三は、教科（現代文）を活用した実践です。まず、「マイ樹木」の実践です。気になる樹木を決め、普段の生活のなかで観察をしながら樹木との対話をします。授業では樹木の傍に佇んで詩作や

観察に取り組んで、樹木に「変身」しようという内容です。続いて、グリーンな地元商店街のお店や企業を紹介する動画（PV）作りです。2020年に開始したこの取り組みは、コロナ禍で職場体験の機会を失っていた全国の中学生を主たる視聴者として想定し、中高生が主体となって近隣大学やNPOに呼びかけて協働で製作・公開したものです。PVではSDGsに取り組む企業を優先的に取り上げるよう工夫しています^{ix}。さらに、環境的公共性の視点から社会課題を検討し、条例案（種苗条例）の提案も行いました^x。最後は、グリーンガイドの授業を高校生が企画実施する取り組みです。これは、埼玉県飯能市の公立小学校と連携して、児童を山へ引率し、地元の伝統産業である林業の体験やマイ樹木のワークショップを行ったうえで教室へ戻り、職業を通して地球環境保全に貢献することをテーマとした対話的な授業を高校生が実施しているものです。

【今後の展望】

グリーンガイド実践のための日本的全体論性を約言すれば、「AでありつつBである」というキーワードになるかと思います。人間であり自然である、教科教育・学級活動でありグリーンガイドである。西洋的：プロジェクト的：イベント的な非日常性を立ち上げなくとも、日本の教員が良くも悪くも担うことが避けられない全体的な教育活動のなかには、それがグリーンガイドとなるための契機が多分に開かれているのです。

ⁱ 引用文の訳出については、前者は筆者、後者は文部科学省によるもの。下線は、いずれも引用者による。

ⁱⁱ 訳文は、村松野乃佳らによる概要・訳訳版(2021年12月10日発表、<https://is.gd/hqQhlf>)を参照した。

ⁱⁱⁱ 引用は既出報告書におけるp.42,p.153。訳出は筆者による。

^{iv} 詳細は、下村英雄・高野慎太郎(2022)「グリーンガイド：環境の時代における社会正義のキャリア教育論」『キャリア教育研究』40(2), pp.1-11を参照されたい。

^v 本節は以下の文献を祖述したもの。Plant, P. (2020). Paradigms under Pressure: Green Guidance. *Nordic Journal of Transitions, Careers and Guidance*, 1(1), pp. 1-9.

^{vi} 竹村牧男(2016)『ブッディスト・エコロジー 共生・環境・いのちの思想』ノンブル社。

^{vii} 所美都子(1969)『わが愛と叛逆』前衛社,p.93。

^{viii} 教材や作品例は以下で入手が可能(<https://is.gd/Y36mA4>)。

^{ix} PVは以下で閲覧可能(<https://youtu.be/kqGPXYEhA3Q>)。

^x 高野慎太郎(2022)「市民的リテラシー教育としてのグリーンガイドスー映画『タネは誰のもの』への教育現場からの応答」自由学園最高学部『生活大学研究』7(1),pp.123-138。

第二部 質疑応答

【高橋様の中学校の実践紹介】

総合の学習の時間でラボ活動をしており、A F F (Action for Future) と銘打ち、中学生が 2030 年に新社会人になるような歳を迎え、職業を選択して社会人として働くということで、今の日本や世界にどのような箇所に問題、課題を感じるかという問いを立て、自他の「困った」を見つけようという question で世界や日本の課題を見つけていった。新聞やパンフレット、書籍、ウェブというところからである。すると生徒を見つけ出し、理想、希望とする社会と今の抱えている課題等を抱えている社会とのギャップを探し出した。

【三村先生】 SDGs とキャリア教育というテーマでお話が進んでいるが、まさに高橋先生の今の実践は、子どもたちがこれからの世界に自分がどういう風に生きていくか、あるいは世界の問題は何か考えながら自分のキャリアを成立するために現在の課題にどう取り組んでいくか、これが、キャリア教育が持つ SDGs の取り組みとの結節点ではないか。

【質問者】 高橋先生のコンピテンシーのお話についてもう少し詳しく。

【高橋様】 具体的に見えた変容としては、プロジェクトがターニングポイントとなったという女子生徒がおり、アクセサリーが好きという理由で、アクセサリーショップで働きたいと漠然としていたが、清水建設さんに行く機会があり、自分たちの町や好きなアクセサリーショップが入っているビルや自分たちの身近な町が建設会社によって支えられている、家というものが、個人が買い物する中で人生の一番の大きな買い物であるということにも気づかされ、そこから進路変更し、大学の工学部とところを第一志望として大学生になった。

【高橋様】 質問：SDGs の視点で、社会意識の変容ができたかどうか。

最初の 5 年間は、SDGs の考え方や理論がなかったために、毎回毎回のプロジェクトが終わった度に、自分の肌感でしかなかったが、理論や SDGs を入れることにより、プロジェクト計画やそういった評価指標により、自分以外の実践者でも誰でも行うことができる。それが 5 年間の自分の肌感の実践と理論、SDGs を入れたときのプロジェクトの主題である。

【高野様】 質問：キャリア教育 SDGs 実践という組み合わせ、学び方について

自己満悦的な活動主義や変容物語を超えて、本当に SDGs を突き詰めて教育として組み立てていった場合に、おのずと倫理のディメンションに入っていく。つまり、どういうふうに生きていくか、生活していくかといった倫理や道德の問題と切り離せなくなる。そこまでいったときに、SDGs に関わる学びは「キャリア教育」の領域に入ってくる。

【成田様】 質問：キャリア教育 SDGs 実践という組み合わせ、学び方について

それは education の翻訳の誤りを問い直していくチャンスである。そこで生涯学習の中で必要になってくるのが SDGs の学びであったり、ESD であったりする。今、教育という言葉を別の言葉に訳すという試みをしているが、「多様な限界や境界を越えた学びと問い、気づきを自他ともに（子どもも先生も）引き出し養う試み」と訳している。

【高橋様】 質問：キャリア教育 SDGs 実践という組み合わせ、学び方について。

教員であったり学校現場には限界があると考えており、だからこそ色々な理想図であったりほかの企業や大学とは、繋ぐという働きが、我々教員には与えられているのではないかと

考える。今回、SDGs という風に捉えた時に大切にしていることは、一次情報であり、本物に触れるということである。なにかキャリアを考えるうえで、パンフレットを渡したり、ネットで調べたりする。実際に自分で行ってみるというきっかけが SDGs になる。活動だけに留まらない探求に向かう一つのきっかけになる。

【三村様】 SDGs への取り組みの中で起こっているものを、キャリア教育、進路指導の文脈で考えていくということも、その文脈があるからこそ SDGs の学びというものが解析できる場合もある。やはり、進路情報の理解、それを通した自己理解が啓発的な経験で展開されれば、古くからキャリア教育の中で述べられているメカニズムである。生徒の活動の様子、活動計画を立てる際に、今何が起こっているのかというものを読み解く重要なカギになる。

【質問者】 学校では教科でのキャリア教育の視点は副次的とされるが、その逆が真では？

【高野様】 同意する。能力開発だけで教育が完結するのではなく、それらの能力を有機的に統合する「生き方」や「倫理観」が同時に問われていかないと、学校教育は単に「優秀な手足」を育てるだけになる。「教育全体が目指しているのは唯一の科目なのです。それはいろいろな形で表されてはいますが、『生きるということ』なのです。この単一な統一体と結びつかないかぎり（略）何の役にも立たないのです。」というホワイトヘッド（『教育論』法政大学出版局、1972）の言はいまでも古びていないと思う。

【成田様】 この質問は問題提起である。対話の中に佐藤学氏の3つの学びのアプローチに加え、ESD や SDGs の実践研究をしていく中で、時間との対話という話をした。これはもちろん歴史だけではなく、学習者や教師自身のヒストリー、それを、見通しを持ちながら問い直していくことが大切。ホリスティック教育の文脈の中で、ライフヒストリーデザインマンガを教職大学院時代に開発してきた。キャリア教育の文脈に繋がるのではないかな。

【高野様】 「ホリスティック」という言葉は、私の報告で提起した「全体論」というキーワードに対応する。既にお話した日本の教育観、自然観、教育課程をとりまく全体論の発想は、まさに日本的な SDGs のキャリア教育をささえるポイントで、プロジェクト的な実践、樹形的・目的指向的な実践を諫める予防線となる。日本の教育風土における学級活動や教科教育をしつつ SDGs のキャリア教育をするという「しつつ」の哲学が鍵となる。

【高橋様】 私も異論はない。キャリア教育と SDGs の話もそうであるが、これらはキャリア教育のいろんな活動の中で取り入れられるものである。キャリア教育や SDGs の視点を生かして、何のために勉強しているのかを知ることや教科と探究の関わりを知ることによって生徒の行動の変容が期待できるので、質問者様の意見には賛成している。

【三村様】 私は3人の方とは違う視点を持っている。学びを通してキャリア教育の見方・考え方を形成し、その時点での思考力・判断力が行われているとするのであれば、教科教育などもキャリア教育の重要な一部であり、それがまた教科教育への方向性を決めるとすると、これは最初にキャリア教育ありきとはなっていないことがわかる。キャリアが前提となっていない中で、どのようにキャリア教育を考えていくかが重要なのではないかな。

第二部 パネルディスカッション

【質問】 高野様に紹介して頂いた「グリーンガイダンス」について討論していきたい。

【成田様】 昨今「グリーン」というキーワードはいろんなところで使われている。そういう点では非常に多方面に受け入れられやすいものではないかと思う。また、欧米の理論にも関わらず、それをアジアの文化に落とし込もうとする姿にも非常に共感できる。私もホリスティック教育をずっと実践してきたが、最近は欧米から入ってきたものをもう一回問い直していく、再考していくことは重要である。

【高橋様】 スターバックスの評価がトップである方のお話を聞くことがあった。その際生徒から、「なぜ就職先をスターバックスにしたのか」という質問が出た。その回答のなかで、その方はもともとコーヒーが好きであったが、ドトールを選んでいて、しかし、自分のキャリアを考える中で、より環境に配慮していたり、コーヒー豆の調達が倫理的であったりしたのがスターバックスであり、そこに決めたということだった。自分たちのキャリアを決めていく際も自分の好みや適性だけでなく、「グリーンチョイス」が重要になると思う。

【質問】 キャリア教育を行う際、日本にルーツを持つ生徒と海外にルーツを持つ生徒では何か指導において違いはあるのでしょうか。

【高橋様】 指導に際して気を付けたことは、同じ地域の生徒が固まらないようにするという点に配慮をしました。私たちも留学などをすると同じ日本人同士で固まってしまうか、あるいは、言語の習得においても現地の人々とどれくらいやりとりするかが重要である。そのやりとりを通じて、相手の文化を知ることでもある。日本国内でのやり取りであるため、やはり共通言語としては日本語を用いて、海外にルーツを持つ生徒であっても日本人の指導を受けながら、日本語でやりとりさせるということ意識して指導しました。

【三村様】 先ほどの貧困層の話でもあったように、いかにして不利益を被るかもしれない生徒を救うか、「誰一人取り残さない」を実施するかというキャリア教育とSDGsの連動が大切であると思うが、同じ質問について、他のお二人の回答はいかがですか。

【高野様】 障壁が出てくるとするならばまず、言語だろうと思う。私は勤務校で探究の時間の責任者でもあるのだが、様々な学校の実践例を参照していると、書いてまとめるということに偏りすぎていて、日本語ができない生徒が取り残されてしまっていることがわかる。あるいは、校則を変更する取り組みが最近流行っているが、こうした書記言語への偏りをどのように捉えるかが問題ではないか。学校空間を生活世界とシステムの視点から見た場合に、音声言語の範囲、声の届く範囲が生活世界、書かれた言葉はシステムに該当する。学校という本来システム化された空間で、生徒の日常生活に繋がる生活世界をいかに形成するか、そしてその場において実践を組み立てることが重要ではないか。

【成田様】 実際に東京外語大では、帰国生と非帰国生を同じ授業において、日本を見つめ直すという授業が取られていたりする。これによって、帰国生独自の視点から日本人学生が様々なことを学んだりもしている。また、学芸大学附属中学校でも、帰国生と日本人学生を一緒にすることで、授業に新しい風を入れることができたりしている。どうしても「誰一人取り残さない」という視点に立つと凸凹の凹を埋めてあげなければならないと考えてしまいがちだが、逆に凸の部分伸ばしてあげることも大切なのではないだろうか。

【三村様】 不利益を被っている生徒への支援という話が出ました。米国には“equity gap”という考え方があり、これは人種、民族、社会経済的地位、性別、身体的精神的能力、その他の人口統計的特徴操作性によって子供の成功指標に格差があることということを指す。私たちは子供たちのことをよく“achievement gap”で見るのであるが、その前提としてすでに“gap”がある。そして、この“equity”というのは目標ではなく、不平等なものを発見する指標なのではないか。登壇者のみなさま、本日はどうもありがとうございます。